

養鶏における夏場対策のポイント

～夏を制する者は生産性向上を制す

4月25日発表の農水省の予報によると、今年5～7月の気温は、北海道・東北地方は平年並み、もしくは平年より高く、ほかの地域でも、同じく平年よりも高くなる見込みだという。昨年ほどの猛暑になるかどうかは不明だが、転ばぬ先の杖と考えて、暑さ対策を進めておこうとしている方も多いのではないだろうか。夏を制する者は生産性向上を制す。そう考えれば、異常気象への一番の備えは設備投資だ。夏場対策の準備には余念のないよう備えたいところだ。

高温になると飼料摂取量が減り、気温が28℃を超えると、鶏は少しでも体温を下げるために、呼吸数を増やす。激しい呼吸により血中の炭酸ガスが減り、血液のpHが上がり、カルシウムが利用しにくくなり、カルシウムの吸収や卵殻形成能力が落ち、カルシウム切れにも似た成績と卵質の大幅な低下が起こるのだ。では次から、具体的な対策について解説していこう。

●飼料と飼養管理を抑える

①飼料に関するポイント

エネルギー強化（MEアップや消化酵素添加）が有効である。また、高温時には油脂が消化利用しやすく、代謝熱の発生が少ないことがわかっている。

また、飼料中0.1～0.4%の重曹添加は熱死や卵質劣化を抑えるが、常時添加するとコストの無駄と軟便が懸念される。猛暑が予測された時点で、0.2%の飲水投与をしておこう。

パブリカ強化は、飼料摂取量の低下に伴う卵黄色低下を予防する。通常添加量の10%強化が目安となる。

給餌について、酷暑期には給餌を停止して、体熱発生量を抑制することが熱死防止対策になる。食後2～5時間に体温上昇が訪れるため、気温の低い早朝に給餌を終わらせておこう。

また、ミッドナイト・フィーディングは、飼料摂取量を促進する最後の手段である。具体的な方法や注意事項は、全農発行『養鶏生産性向上ヒント集』等を参照いただきたい。

②飼養管理対策のポイント

換気扇を掃除すると風力が向上し、冷却効果を高める。鶏舎を整理整頓することは、ホコリを減らし気流をスムーズにする効果があり、お金をかけずにできる対策だ。また、夏場は集卵回数を増やし、鶏卵を暑い鶏舎に

置かず、涼しい場所へ速やかに移すのがよい。

鶏糞にウジが発生すると、ウジが食べた鶏糞が液化し、処理がやりにくなる。有毒ガスが発生すれば鶏舎の環境が一挙に悪化。鶏糞処理は最重要課題だ。コクシジウムは鶏糞などで成熟して鶏の体内に戻ることで増殖するので、鶏糞は速やかに片づけよう。

●体感温度を冷やすために

③体感温度管理のポイント

まずは鶏舎に入る熱を減らすため、屋根へ散水し、屋根を白く塗る。消石灰などを高圧洗浄機で屋根に吹きつけて塗装することで、熱を反射してくれるのだ。石灰は雨が降ると徐々にはがれていくので、追加の塗装も必要に応じて行う。洗濯のりなどを液体に混ぜておくと、石灰ははがれにくくなる。寒冷紗やヒサシを設置し、壊れていれば修理しよう。

冷房については、クーリングパッドが目詰まりしていると効果がなく、2～3℃ほど舎内温度を上げてしまうので、こまめに掃除しよう。また、通気口に寒冷紗を合わせ、ビニールホースなどで散水すれば、簡易クーリングパッドとして使うことができる。これも全体にまんべんなく水が染みているか注意しよう。

ファンによる送風は、鶏の体感温度を下げる効果がある。さらに、細霧冷房（写真）を行うと、濡れた手が乾くときに熱を奪って涼しく感じるのと同じしくみで、水の蒸発とともに気温を下げる。細霧冷房は短時間で霧が蒸発して消える状態がベストで、霧がかかり、鶏や物が濡れるような状態では、蒸れてしまって逆効果だ。最近では小型のタンク式で、配管がいらぬ安価なもの、移動ができるものもあり、活躍してくれるだろう。

夏場対策について、ポイントをまとめたパンフレットを作成しているので、是非参照いただきたい。



舎内の温度管理に有効な細霧冷房